

伊香保志

卷二

⊗

i 62.

492.54
IK
2

No. 2149
18 i 62



富士川文庫

2722

伊香保志中巻目録

○名跡

伊香保神社

醫王寺の温泉

上め山城士

關所跡

向山

湯元

物聞山

御蔭の松

温泉

温泉神社

天宗寺

伊香保八景

湯の澤

猿澤

金毘羅山

丸山

水澤山

伊香保志

天香樓藏

中一

水澤観音

船尾の龍

森田堰

有馬の郷

桃井の郷

箕輪城址

がらめまきの温泉

車川

群馬の松

高根

船尾山

八坂の井手

湯上村鑛泉

若伊賀保神社

井出の郷

椿名神社

白川

群馬の郷

榛原

申ノ目一

二ツ嶽

八ツ塚

阿蘇山

摺碓岩

伊香保富士

石垣沼

烏帽子が嶽

硯が嶽

氷室が嶽

天神峠

蒸湯

相馬が嶽

黒髪山

座主が池

伊香保沼

沼尾川

鬢柳が嶽

掃部が嶽

木部の墓

榛名山

榛名神社

○近傍各地高低實測表

○産物

○伊加保榛名三神の辨

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 山, 郡, 社, etc.]

中ノ目二



伊香保志中巻

東都 秋萍居士 輯

名跡

伊香保神社 伊香保の市街の南の上石段の第一高き處

子鎮座を群馬縣と社縣社とを古より國幣社に

郡中廿九ヶ村の郷社あり 近傍九ヶ村 祭る所乃神を大己貴

命にして毎年九月十九日と大祭とに維新のノ前を湯前大

明神を称せり 湯前社号の事ハ末の三神の辨并 明治十一年

春焼失の後今尚假殿あり座あり 社地海面より高きこと二

千七百十六尺南より山を負ひ東北を打開きて遠くと越後境



おつるいそ
 けいさく
 打たひく
 守りあふのふい
 保の月

松波資之

上山

中ノ一

伊香保神社



そののららる根の
 月を待つやう
 まらまらうあ
 はをくはる

博房卿

高根

中ノ一

ふる三國峠をゆくみ右に續き會津日光の山と連る近と
 吾妻川を隔てて正面より小野子山 小野子村あり又男子山と書
 小野の地あり
 万葉集子 詠むる所あり 下巻萬葉歌 更右より向ふ東
 子近と赤城山見え又眼下を市街と臨み絶景の地あり
 市中諸樓より北の方向
 眺望を皆此の如し
 當社を延喜式神名帳より上野國群馬郡伊加保神社名神と
 あり是なり 赤の三神の稱あり 名神大座を以てるを神祇名
 神祭二百八十五座の内は祈年月次新嘗等の所祭は案
 上官幣に奉幣はる神より重き神あり 國司のその國に奉
 祭るを國幣といふ

中ノ二

名神と名をばしき神あり 古に大座小座を祭る座の
 くらみあり 又當社位階の事を續日本後紀より承和二年九
 月辛未以上野國群馬郡伊賀保社預之名神同六年六月甲
 申奉授上野國無位伊賀保神從五位下又三代實錄より貞
 觀九年六月廿日授上野國從五位上伊賀保神從五位下とあり
 てその後同十一年十二月廿五日より五位上同十八年四月十
 日に從四位下元慶四年五月廿五日より從四位上と次第を授
 ちらる 以上三代實錄 その後代々の朝より天下の諸神に位一級を
 増すの文の諸書より見えたり 朱雀帝の天慶三年庚
 子正月白河帝の永保元年辛酉二月崇徳帝の永治元年辛

酉八月、高倉帝の治承四年庚子十二月、後鳥羽帝の元暦二年乙巳三月、土御門帝の建仁元年辛酉二月、龜山帝の弘長元年辛酉二月、後宇多帝の建治元年乙亥七月、後圓融帝の永徳元年辛酉二月等あり

此の後も尚ほ、凡そ以上の中辛酉ありと革命の御祈のありありあり

大の年、よく推せど伊賀保の神と建治元年丁酉一位ありたりきと、位階を授けらるるを人の位とを異は

て位田とて位の高下、つまを田を給することあり、或は

神田とて寄附せらるる名目あり、大座小座官幣國幣を

以て、神の位、や、ゆるべき又上野國神名帳此の書の末の辨の下の

を、と、一位伊賀保大明神と記せり、又倭論語卷一神部

中ノ三

伊加保大明神託上野國

わが國の直ま心せ人の國を、つらうある徳とありけり、

以て、益人よ、直ま心せ、しめ、ま、あ、び、る、ま、を、

と載せたり、倭論語を傳書ふれど、

温泉神社 伊香保神社の攝社あり當村の社はして少彦

名の神と祀り、往時を薬師佛と配せ、祭を、薬師と、

此、末の三神の、堂を伊香保神社の西に、并び、

後、未、再、建、あ、り、を、同、社、社、の、中、を、合、せ、祭、を、四、月、八、日、と、例、

祭、を、上、野、國、神、名、帳、に、群、馬、郡、正、三、位、温、泉、明、神、と、

あり、あり、と、以、り、

湯泉山醫王寺 伊香保神社の石垣のトチヲリ天正三年甲戌八月岸筑前介安兼が草創あり天名宗に

今因寺よ 元を温泉神社乃別當ありし今別當を温泉薬師と本尊より災後假堂あり

湯前町の別當湯泉寺の寛永中創立し山の上伊加保神社の傍よりしが今廢

香雲山天宗寺 市街の東北の入口より曹洞宗あり武州郡骨波田村長泉寺末にして

今河内川の良珊寺より兼ぬ 天心中木暮下總守祐利の開基としし

村志より元和元年開基とあり存心致年と粗語を 開山を中山良信和尚より祐利の法号と興雲院天宗存心庵主より依

て寺号とし火災の後未建立は 當寺の門前天満宮あり當村木暮氏一族の鬼門除せしを祭

る所ありしが焼けて再建ふし又是より東の山より八幡宮あり木暮八郎が氏社とし

と建つ 明治六年建つ十一年焼け十二年新築成り生徒男女八十餘人

上の山 町の南より上なる山の名より伊香保の町を即此山の中腹に家居せり雑木生茂り嶮しとて登り

難し八景の一なり月名あり 伊香保八景 八景を上の山乃月蘭屋の雲猿澤の猿物聞山の時鳥丸山のつじ高根の鹿二ツ岳の雪沼の杜若とつじの皆地名より次より此八景の事何人の何時頃より定めたり

今知らるる詩歌も多く傳へられ物聞山の時鳥と伊香保の沼のつじ草との歌の外を皆いと近き世の

今寺内より公立の小学校

今寺内より公立の小学校

今寺内より公立の小学校

今寺内より公立の小学校

今寺内より公立の小学校

今寺内より公立の小学校

今寺内より公立の小学校

今寺内より公立の小学校

今寺内より公立の小学校

今寺内より公立の小学校

詠ふれど別子掲げを

關所跡

町の板せり

つめたる處より今廢せしむる只門

の址あり存まらぬ

關所跡

關所の雪を八景の一と云はれ

乃前を三國街道ある

金井驛

關所のや小坂村との間あり

吾妻川水増し

通行止まる

河を高寄より

當村を過ぎ

西北ある五町田驛

河を又西北に板き

吾妻川の流橋あり

今ある洪水も落ち

せ渡り原町驛

河を又より東に

ある中野係驛

尻高村に屬す

三國道の中山驛は出づこれ

せ三國裏街道

河を固て

當地より番所せ設けられ村民

られ守にせあり

小巻村民八氏

甲ノ五

湯の澤

町のあり深き谷あり西南ある二つ岳あり

谷の水を温泉の

流を以て

落ち北に流を湯

中子村の下に

沼尾川に入る

向山

湯乃澤を隔て

西にあり山あり山の木名を一文字

とりの伊香保の町と相向へ

ど向山の名あり

天保三年村

民福田某の開き

所にて

土地出雲風色好く玉兎菴を

以て酒肆あり

福田 鯉射殿を池は高ひ

を客より供を傍に

辨財天の祠あり

谷を鬼谷といひ

西の山を袋山といふ

此邊の山楓樹多し

紅葉の名所なり

伊香保より榛名へ趣

とを六の向山を過ぎ

此より南小石の板路

り甚険し切通し

十二三町登りて榛原（後）に出づ

猿澤 湯元路の中程を左の山より右ある湯の沼の谷へ水

の流を落つる處を以て往年を此迄猴甚多のりしを以て

猿澤の猿八景の一あり

湯元 湯元路を町の上ある薬沙堂の境内と過ぎ山の崖を

湯沼に沿ひて南へ行き前の猿澤をも過ぎ尚南へ行くとあり

凡八町許にして小沢東南より斜に來り湯沼を落つたの地

に湯本神社（もと湯本）あり社の庭今開きを遊園や作ら

ぬ小溪即温泉の流を以て沿ひ登ると二三町樹木

生ひ茂り兩崖のつらなるより温泉涌けり（涌口の事の上巻の温泉の條）

中ノ六

十三四町に（谷頭の地より）近くと二ツ岳より新道開けたる

金毘羅山 頂より石の小祠あり琴平秋葉の神を祀る故に

名少の町の東に峰の頂を峻しを坂と回り登り十町許

頂に樹木数株ありその姿眺む奇絶なり北を越後會津日光

の山と連り東を赤城山の全形を見裾野遠く蟠り延びて

頂常より白雲を吐く東南を當國の平野と見み利根川鳥

川を白帯と引くがめく前橋高寄の市街其間を隠現し

て多水より先を武蔵より連りて極目際には又願を伊香保

の市街と踵のりを見たり

伊香保志

物聞山 のききやま 藻塩草秋寐覚 のりなぐさあきねあき 物聞山を上野と云り和漢三

才圖會 さいづゑ 物聞山を伊香保より云あり上野志名跡考

号 なな 日を伊香保温泉の東南松茂屋し山ありと云り依

前の山人 まへの人じん 山の本名あり云 或を云水浮山云ふ 夫木集の

伊勢の詠 いせのよみ とも云て名もく今物聞山の時鳥を八景の一

也 や 出齊家乃集にも 物聞山の歌あり

丸山 まるやま 伊香保の町より十町許の麓の小高き岡あり樹木鬱

蒼々 さうさう しく中丸山稻荷の小祠あり 数年前を参詣する人いと

地も荒 ちもあらい 此山の躑躅を八景の一 今を失せり

御蔭松 みかげのまつ 伊香保より澁川路をいふこと一里許ある路の右

の岡 のの あり喬松一樹空を凌ぐり明治十二年 皇太后宮

温泉行啓 おんせんぎやう の対 たい の松の下 のまつのした 御野立 ごのたて あり村民後 そんまんのち 御蔭松 みかげのまつ を

稱 いふ し萬里小路博房卿 まんりこうじはくぼうけい の詠 よみ 中 ちゆう 楫取素彦君 はしとりすひこきみ の文 ぶん と代碑 しろいし を

周 しゆう 了 りょう 建 た つ

是 こゝ 中の松 このまつ のやとり のやとり に に 多 おほ くの の け を を を 経 へ

是 こゝ 歳 とし 己卯 きぼう 皇太后宮 こうたうけい 行啓 ぎやうき 伊香保温泉 い香保温泉 七月十七日 しちがつしちにち

車 くるま 駕 が 發 はつ 京 きやう 往 むか 返 かへ 由 よし 此 こゝ 道 みち 時 とき 屬 ぞく 盛夏 せうなつ 掃 はら 松 まつ 下 した 以 もつ 休 やす 車 くるま 駕 が

焉 こゝ 既 すなは 而 して 土 つち 人 ひと 建 た 石 いし 命 いのち 松 まつ 曰 いふ 御蔭 みかげ 松 まつ 請 こゝろ 博房卿 はくぼうけい 之 の 詠 よみ 屬 ぞく

以 もつ 余 あつ 書 か 題 だい 額 がく 博房卿 はくぼうけい 以 もつ 本官 ほんくわん 役 やく 駕 が 余 あつ 則 すなは 管 か 地方 ちほう 卿 けい 之 の 詠 よみ

中 ちゆう

伊香保

天香樓藏書

芝中
御蔭の松
由野立の松と云



中ノ八

子之介の

松の石

舟場

松

美の

舟場

博房卿



余之題。皆不可辭者。碑成矣。併記其事於碑陰。亦出土人之意云。明治十二年己卯秋九月。群馬縣令楫取素彦撰并書。

水澤山 又淺間山ともいひ伊香保より東南一里水澤村の上

より此の山の東北の端より三峰の尖を傳へたるを

遠くより望むべし この山ニツ岳と共に東京九段坂又墨田川堤より見ゆ 頂まを三十町甚嶮

し頂より淺間の社あり 陰曆七月十三日近村の人登り指づること夥し

水澤觀音 水澤山の東乃麓水澤村の上より寺と五徳山水

澤寺といひ天台宗にて僧房を坂の下のり山門本堂僻地を

つりてを北壯嚴 宝曆の頃の再建といふ あり本尊千手觀世音を坂東三

甲ノ九

十三番札所の第十番あり向ひて堂の左に板佛ありて

元亨四年三月廿日と記し左右に梵字と名を一つつけりといふ

傍に六角堂ありの立像の銅地藏佛 長六尺六體を六面を

安しを輪轉せしむ 今盜と恐まを奉堂に移れ又寺の縁記に伊香保姫といふもの傳と載せたり

舟尾山 又不入とも書る水澤山の南谷を隔てり低し昔

此山より巨刹あり傳教大師の開基せしなり今堂の入りて

山の南の中腹より遺跡あり又その頃を山中九十九谷と唱

へる谷より僧房数百あり今よりその跡をりやて某この

地名残まり文徳実録より嘉祥三年夏四月丙子詔して上

野國聖隆寺と延曆寺の別院ともいふとあるを今何地やん

知らるる或を此寺あるべしとて主人傳へ云千葉介胤は常胤の長子あり建仁二年六月十一日歿す此の山の觀世音は祈誓し一子を得たるは佛にあられ短命あるべしとて寺僧は屬して山を置きて後胤は其の子は會せんて山に入ら僧徒匿して出さば胤は怒りて山を攻めしめて却て僧徒の為に敗らる後胤は再舉して遂に一山の堂坊を燒き止むたりといふ船尾祀といふ宇本一卷ありて是事と祀を安談の多し又山下の山子田村に今天名宗柳澤寺といふあり山号船尾山といふ即此寺と稱しといふのなりといふ

船尾の瀧 船尾山の東北なる崖の絶壁より落つ高さ二十丈幅二間水烟四散して近づくべし壯觀なり是より東

中ノ十

北なる瀧川の遠より遙く見え白布を懸けたる如しといふ下流を瀧の渚といひて東に流れて利根川に入る

柏木より伊香保路を此滝の渚を渡りたるその路ありて奥二十町あり

八坂の井手 萬葉集に八坂の井堰を詠むる地を水澤村

より南の方八九町ある八坂といふ小坂の上より此船尾の瀧の遠を引きて今井出野井出野入或を井出平といふ字

とらるるその舊跡を堰の跡といふなり

下巻の萬葉歌

森田堰 又新堰といふ即船尾の滝の流とち引まき

ある上野田村へ導るる水道あり天保年中上野田村乃

森田重信もりたしげのぶをいへる人官は清ひく開く長さ千七百間あり村人永く旱損の患せ免るをいへる滝の池の北の上せ古の八坂の井の跡といふべし奔り流まふり

湯上の鑛泉 澁川驛の南三國街道湯上村路より東の平地

は涌く冷泉は鑛氣あり古老傳人云往古此の地は温泉

あり故に村の名は後伊香保の温泉涌き出でたり此の

泉脈止まり此の冷泉をその名残ありや

有馬の郷 これも三國街道より有馬村の地あり和名抄

國郡部の郷名は群馬郡有馬安利少なり是より延喜式

左右馬寮上野九牧の中は有馬島の牧といひ拾芥抄牧名

にも有馬の名のり

若伊賀保神社 有馬村はゆり村内泰叟寺の境内の山に

鎮座す三代実録は貞觀五年十月七日授上野國五位上

若伊賀保神從五位下元慶三年閏十月四日授從五位下若伊

賀保神從五位上同四年十月十四日授五位下伊賀保神

五位上等見たり此の末の伊賀保の上よそ上野國神名帳

は總社相殿十社の内は五位若伊賀保大明神といひ又

同書は從四位下伊賀保木戸明神五位下小伊賀保木戸

明神共より有馬村の宇神戸五位下小伊賀保明神水沼の觀

田地より從五位上伊賀保若御子明神等と載せたり音堂その

伊香保 船尾山 船尾山 船尾山 船尾山

伊香保の号、つらと見せどあはらの
地古を皆伊香保の内ありしと云ふべし

桃井の郷 和名抄郷名より桃井毛々とつり今の船尾山の麓

山子田村の迹その舊地あり足利氏の頃桃井氏の一族此

起る城址なり 今桃井といつる郷名
の區域此を甚廣し

井出の郷 亦和名抄郷名に見ゆ今高寄と柏木村との間あり

井出村あり萬葉の八坂の井を此地歟ともいふ下巻萬葉
秋の部

今村内より八坂稻荷井堤明神といつる夫木集り

井出の社ありあるも此處りともいふなり

箕輪の城跡 船尾山の南東明屋村より又箕輪とも書

るの箕輪軍記より抑此城を箕輪と申す事と榛名山乃

申ノ士二

尾寄堀切築きたる城の南表を箕輪より似たりと云ふ名づけ

たり云々をいり當城を大永年中長野伊豫守在原信業

長野と和名抄郷名にルが此地より南本郡白川、
新波小波の地あり御名よりて長野とせしむ

長野氏を鎌倉の管領山内上杉氏の長臣にして當國の豪

族あり信業の子信濃守業政忠勇衆を起す天文二十

年上杉憲政當國平井の居城を北條氏康の命より落され

越後より奔り業政の後上杉謙信より属して北條と戦ひ

弘治永祿の間武田信玄此城を攻むると五年を歴す

も業政常より防ふを却く永祿四年業政歿し子右京大夫

業盛継ぐ同六年武田氏大舉して攻む業盛能く防はしが

伊香保

天香樓藏

遂に陥る後武田氏より屬し瀧川氏北條氏より屬し天正十八年に至り徳川氏井伊直政々々の城主と爲し十二後直政高

寄子移りて此城を毀り郭堀門櫓等

椿名神社 箕輪の城址の東南八町許椿山といふところあり倉 鎌

九代祀子箕輪城を椿名明神 延喜式神名帳より椿名神社

是より椿名大神宮といひ祭神を天照太神三輪大神宮

大神三社相殿といふ額は三輪大神といひと地名也上野國神

名帳より従一位椿名大明神といひ

からめき温泉 相馬が岳の東南の麓西明屋村の山間より

湧り土人をガラ 泉質詳まらば諸瘡火傷にややく温泉

甚薄きが故より火に涌りて用ふる

白川 又相馬川ともいひ相馬が岳惣碓峠各谷の水落ち合

ひて東南より流き車川も落ち合ひ南より流き白川村本

郷村より烏川へ入る

車川 榛名山の氷室谷より出て南に流き敷村を歴て全

敷平村の南に至りて白川へ入る

群馬郷 善地村車川の室即その舊地ありやといひ和名抄

國郡部より郡名郷名共々群馬久留とより榛名山元亨三

年の鐵燈籠を車馬郡といひその後までを尚らくまといひ

しせ今を字するよらんといひ或云久留末とを黒馬乃

義ふるふし延喜式左右馬寮は上野國九牧と有りて此國
を牧馬子因に地名多しと有り前の有馬村
夫木部を治りて其の里人を以て木部と云ふ

比利根川を今も前村の利根を水廣瀬川
セリと云ふ其の里人を以て木部と云ふ

群馬の松 善地村の南十文字村 今も長野郡 宇長坂平と云ふ

寛文のりつ元禄三年舊の樹を枯せしは今も松も大木也

今も今も高き二丈餘東西十二間有り互に 此より南白岩村より東
十五番白岩觀音のりつ彩

長谷寺 ○以下伊香保の西南より戻り記す

高根 伊香保町の西南湯の涌と隔て高と見ゆる山あり

樹木は二三十年前をこの山より鹿多と伝ふし今も有り

高根の鹿也八景の一と云

榛原 伊香保より西南榛原名山あり路を廣き高原はして

ろれせ伊香保平と云り東南を二の岳相馬が岳西北を高

根西澤より隈り西南伊香保の沼ありまを凡二里許一

面の茅原をより萬葉集より岨の榛原と詠めると此をせ

指せると云ふし古を榛原のりしりの軟 榛原を榛原と云ふ

或云氷凍柏木をの結 夏秋の間草花多し

二の嶽 伊香保の南稍西即榛原の南より有り 水浮山船

峯駱駝の背の如く西北ありと男岳といひ 稍あり 東南ありと

女岳といふ 西南の陰より孫岳と 伊香保より迂路して林蔵より

至多三十町、湯元より近路で行け山は樹木少く頗険し
 女岳の頂より大なる孔、を十三四町あり埋まを低き樹木せの覆へり
 即大古火を噴き孔を土人も此事と言傳へ金山花崗
 石を焼け割けたる跡處に、にりり火を東北へ噴きしと見え
 山より東に凡伊香保の這一里四方の地浮石地層を成せり
 此噴火山の火漿を_とと知るべく麓の蒸湯も硫氣珠_と
 志し二の嶽の雪を八景の一なり腹中卒の間に谷は夏
 も常より氷り取り取を市に出せ

蒸湯

女岳の東の麓より砂地の間に蒸氣を噴く蓋し温

泉ありとも分量乏しく現は飲水を二十町南の麓の水溜の壺より取る泉皆火脈の火氣

の為は蒸發せり騰ると見ゆ此湯古くより有りて以
 前を大なる木屋も有り浴者も常に数百人ありしに明
 治維新の頃大に近傍の樹木を伐り又同二年の次近き
 山大に荒れしこと、に夫より湯ぬるくありり同一年
 至りて全く止まり後樹木も再生長し水脈も復したる
 こと同十一年三月に至りてまた蒸せり地を掘りて土室
 をし文餘の材を杖で打込み多々の孔を穿ち地底数丈皆砂土浮石
 蒸氣を噴りしめ上り屋を覆ひ人その中に入り密閉し
 て體を蒸を密閉の熱度百十度より三十度に至る泉質
 詳し硫黄の氣志しと閉づると稍久しあれが動

二ツ岳

伊香保より西南十町
竹ノ尾より
女岳の傍より往古噴火
の孔あり
西岳の字より夏も氷り

雙峯積雪

積雪埋深谷

陰風吹不融

誰圖炎夏日

冷氣欲凌空

勺水

男岳



中ノ十六

二ツ岳の雪

松林
雪の
姿之

女岳



二ツ嶽の麓
蒸湯の景

朝討靈源出
客房雄雄嶽
下阪羊腸沼
知硫火煮泉
處蒸氣浮浮
穿地颺



中十七

依巖小屋似
危樓
誇說奇方引
客留
試入客中浴
蒸氣
淋漓熱汗滿
身流
中洲



新橋録

新橋録

もまれど氣を息をすることの依り近年をよは氣孔數處
 と穿ちとある又別は屋を造り頭部と外は吐體の蒸
 すりのりゆ 俗にゴクモン 今傍り浴戸四軒あり近村の者止
 宿して浴をも多し 寒湯浴とて冬 疝痔、水腫、子効、りや
 伊香保の浴客一日の
 運動は来る者多し
 ハツ塚 榛原の中程は南へ並び八の土塚あり寛文年
 中榛名との界標として築きしものあり此處の字を見晴
 しやりの山の岡の上より大岩あり獅子岩といふ
 相馬の嶽 又相満或を馳馬と書るを二ツ嶽の南は谷を隔
 てりりふの連山の中より最多く又最険し巖は鐵鎖を

互に攀ぢ登るふの方より登る稍易し 伊香保より南四十餘町まで
 東に向ひ十町餘ありて頂より至る峯 頂は躑躅が山 頂は躑躅が山といひ
 其輪組十三ヶ村入會秣場は界す
 平の将門の石像を置と相満明神といふ六尺許の立像
 髪を被り劍を持ち官服を着て恐しきを相あり山
 名より近年附會して頂より四方数十里の山野を望むべし
 造り立てたるあり 相馬次郎師團の
 傳へ云千葉介常胤の次子高井次郎師胤 養子とあり相馬
 小次郎師常と稱す 嘗てこの山の頂より遠見番所を置きた
 元久元年六十七歿
 しが故に名をなす
 安蕪山 萬葉に詠める山なり裾野も廣く秋より由りて
 即相馬の嶽の一名ありといふ又中古此山あり其輪の字か

安藤の社と呼びしと云或云相馬が嶽を安藤山
岳と云と畧轉せしと云はね歎と

萬葉集 上野の安藤山當世を唐と云はしそのをいつ強をを

大木 安藤山と云はし唐と云はしそのをいつ強をを

同 安藤山の中より出づる白川のつらさを云ふ

同 或云安藤山白川を肥後と云ふと云れど宗尊親王の歌も野と唐と云ふ

萬葉の上野歌へのけり集りて安藤山と云ふをいつ強をを

地子白川にけり且親王を鎌倉に居たりし

然も其輪軍記に武田勢が城を圍むる状と説く

北を安曾山相馬が麓船方山 船尾の誤

桃井が原野尻の嶽

山云と云れバ相馬が嶽とを別ある歟 一説に船尾山

黒髪山 北國紀行に堯恵が長野 前の箕輪の

頼が陣に黒髪山と詠みしを 乃陣所小野景

たる山の状ふるに依りて相馬が嶽の別名ふるに

然も上野傳統雜記に伊香保の沼より西は硯嶽北

黒髪山二ヶ岳東は相馬が嶽と云はし是亦別の山ある歟

いり上毛志料より伊香保黒上山をみのわの北と云

堯恵を下野の黒髪山と詠ししとの註と然も

今と土人も此の山の一名を呼ぶに至り

摺碓岩 相馬が嶽の西より原の左の山乃上より大巖

巖は洞門のり岩の形摺碓に似たりと云

超々々東南箕輪の方より路より摺碓峠と云ふ此山の南の麓より様々洞孔を穿ちたる跡有り往年高奇侯沼乃水せ此より南へ導き箕輪を二三萬石の地と新開せんやせに沼尾川の下流ある村に岡崎の者難儀と申立てたりと廢止せし跡ありと云 次のスリバチ池も此時掘り跡をいり好状と云

座主の池 原の中、小富士の麓路の右より沿ひて方三丈許の窪き池有り常に水は頼印座主 此の池の事頼印の事共より卷山吹日記よりあし

伊香保富士 小富士又沼端の富士と云 土人古言を存し沼端と云

岳ふど 又沼尾川の土人を富士山と云 土人を富士山と云 土人池と云 又スリバチ池と云

川口と沼の浮とり 土人池と云 土人池と云

甲ノ二十

あわの岸に沿ひて、りり形略駭河の富士より似たりとの麓ある沼の汀又一番山といへる小山有り土人怪しき説を傳へて云往古鬼神有り一夜にして此の沼と富士とを作ると功一簣を虧き夜明けたり故よりその一簣の土を覆す即此の小山なるを云

伊香保の沼 古伊香保村より屬し寛文年中より榛名子入る榛名の神の御手洗水と稱し東西十一町南小十七町周三十五町西山の麓を吾妻郡 十二ヶ村 屬せり古歌より多々伊香保の沼の以のほして又いづれの沼のいづれ草と詠るる 今沼の三方を皆山にして東麓の遠淺より

伊香保

伊香保沼

伊香保町より
西南二里餘の伊香保沼
山中より
今榛名山のみくまき
り、東西十一町南北十七
町周三十五町

萬葉

上野の伊香保の

沼に植たふまき

のくまきひんや

種ももあけん

拾遺

伊香保の如

以のちの沼に

いかに

鳥しと人を

以まひとあ

読人不知



中二十一

伊香保

芙蓉低在水水面欲
生香敢著新詞筆古
歌有古芳

勺水

路自香山登幾回春
名嶽畔小湖開三旬
慣聽溪泉響忽怪縹
殺岸下來

用先君香湯討之
韻 如雷大規修



野子つらゆめ 此を若 多し その 汀は溪蓀の一種葉細く長く
 花の辨狭きもの多し 花 田中芳男君の説子花戸小
 下野のアカヌマアヤメ 又
 岸田吟香君の説子云此の沼の 花 何時の 花
 里は移し植多々名を花菖蒲と付けたるをその葉乃
 菖蒲子似たるが 花 此の沼を四方の岸より
 水涌き常々烟波滔々たり下流を 流 沼尾川
 とある此の沼夏の螢と殊子奇観と 夫木集の歌 冬を沼
 水一面子氷とたる 鯉鮎殊は 大 い や ま あ ん を

中二十二

魚多し往時を殺生を禁断す今も土人を憚り多し漁
 又沼の水を憚り用るは唯旱魃の時遠近の人
 来々雨乞を古史傳は曰く此御手洗の水を借る此山
 の神奴は人に神に奏し竹筒に入きて取らざるを幾程
 遠き處ありとも若途滞る雨を其家子雨降り
 雨乞を敷は故に休らざる歸り雨乞を
 地の竹筒を掲げて本へ返る然れを
 決り雨降らばといふこと云く又岸田吟香君の
 説子此沼往古に餘程大なる沼ありしあり今二ツ
 岳の間に富士のり地形を見たり沼の方へ自然子

傾きを自治の跡ありし趣なり
 座主が池あど其せ 然る大湖あり
 こそ都へも聞え詞人の傳賞する所ともありしをるるれ
 何時の頃かの甚しき旱魃ありて此の沼を切落し尾
 川の落口水せ引きたる事いひし由せ二十年前
 萬延の頃榛名山の某院の僧より聞あり蓋古傳あるべし沼の狭くありし
 も其頃より事なりと云ふなり

石垣沼 古歌より多く石垣沼と詠み藻塩草等詠書る石垣
 沼上野といふに依て伊香保の沼の異名ありともいふ然れど
 も或る赤城山の沼あるともいひ或の石垣沼と地名よりいふ
 唯岩石の四方より垣のめぐり時ちるるにりつありともいふ指

中二十三

其所を知らず 石垣沼、石垣山の説
 卷の山吹日記に見ゆ

沼尾川 沼の下流より小富士と烏帽子が嶽の間を東わ

流る川筋より瀧とありて落つる處三ヶ處あり其大なるを

辨天の瀧より頗奇觀ありとも川下を湯の沼の水を合せ

本小岡寄新田の下に吾妻川より入る川口を沼の川筋を群

馬吾妻の郡界と云

烏帽子が嶽 沼尾川を隔て沼の小岸よりなり又冠山或

加々鞠山ともいふ沼の南より望めど形風折烏帽子より似

なり

鬚櫛の嶽 烏帽子が岳の西より並ぶ形の似たるを名と云

弦月かみつきと覆ふせたるがめし以上二山にやまを吾妻郡むづまに層そうせり

硯いんの嶽たけ 鬢かみ櫛かみの西南せいなんに連つらなまる山やまあり頂つたえより大岩おおいわのりり

その面硯おもていんを立たてたるが如ごとし

掃部うぶの嶽たけ 沼ぬまの西にしに聳そびえたる大山おほやまあり樹木じゆく鬱う蒼そうす山の

西にしより南みなみより少すこへ超こゆる路ちみちのりり地藏ぢざう嶽たけとりの此こゝの山やまも吾

妻郡むづまに層そうせり

冰室ひむろの嶽たけ 沼ぬまの南みなみに天神てんじん嶽たけの東ひがしより山やまありとりの或云此の山

氷ひのりり二ツ岳ふたつだけあり彼かの山やま一名いちめいは、いりりねれと

水部みづべ彈だん正せいの室むろの墓かぶら 天神てんじん嶽たけのふり麓かき沼ぬまの汀しづみより舊ふるを

石いしを水みづに沈しづみ後のちより改あらため作つくる臺たい石いしより天正てんせい十三年十二月廿

中二十四

七日ななと、いりり水部みづべ彈だん正せいの妻つまの沼ぬまより入いりて死しせ

が墓かぶらありとりの此事つぎ怪談あり下巻今いまも墓かぶらを去さり

祠わらうを立たてて祭まつる水部みづべ氏うぢを當國あたりのくに緑野りくの郡ぐん水部みづべ村むらとつ箕輪みきわ

軍記ぐんきより水部みづべ宮内みやうち少輔すさふ實一じついつより天正てんせい中ちゆう瀧川たきがわ一益いちやくより後のちへ

士しより水部みづべ宮内みやうち少輔すさふ貞朝じんちゆうより夫そのむらの族むら歟や又また沼ぬまの死し岸しづみ

あり山やまの傍そばより吾妻郡むづま原町はらまち驛えき善導寺ぜんどうじ 浄土じやうど 二世にせい園光えんこう

上人じやうじんの母ははが墓かぶらあり明徳めいとくの年号ねんごうを記しるす、年としに善導ぜんどうより

天神てんじん嶽たけ 沼ぬまの西南せいなんに榛名はるなより超こゆる山やまの嶽たけあり古の伊香保村

頂つたえより榛名はるなの嶽たけの大鳥居おほとりゐのりり方かた沼ぬまに向むかふ榛名村の界 嶽たけ

の末すえの山やまより天神てんじんの石いしの祠わらうのりりれど名なを以もつて嶽たけよりふの方かたを

見ゆれせど湖水の泡を一環鏡の如く鬚樹あり山に影
 倒り水に映る風光言えん方冬し峠より南へ嶮しき
 坂をひるこし十八町より榛名の神社より峠より西
 沿ひてゆき硯が岳と掃部が岳との間を越えそふある吾妻郡
 の原町跡よりわづし又峠より南榛名へ下る路の半より右へ入る
 掃部が岳の地花味を越えて
 榛名山 當郡の西より連山の最西よりありて稍低く西を杏
 が岳より連り此山春名村より麓を萬葉集より伊加保呂の
 榛原とも詠えられ古此の西の山より榛名の樹多かりしより

しそ名起るるとの秋山より樹木多く又奇巖怪石多し
 殊に神社の雲巖石並に立ち突元空より奇と怪々の形を
 中二十五

中二十五

現ずありき者を柱の如く聳えそ松杉の梢乃上より出を
 横ふる若を梁より似て倒れそ谷水の上下架る若龍岩
 と以つらひ若龍を数積むつげ今や崩きんとする形あり
 鞍掛岩といふを鞍の前輪を崖より懸けたる状を為せりその
 外雷電岩大黒岩鎧岩龜岩瓶子岩獅子岩のをまき岩あり
 皆その形より依り種々の名ありて数へ盡しけり溪水を
 潺々として脚より響き松杉を鬱くして天日と覆つり

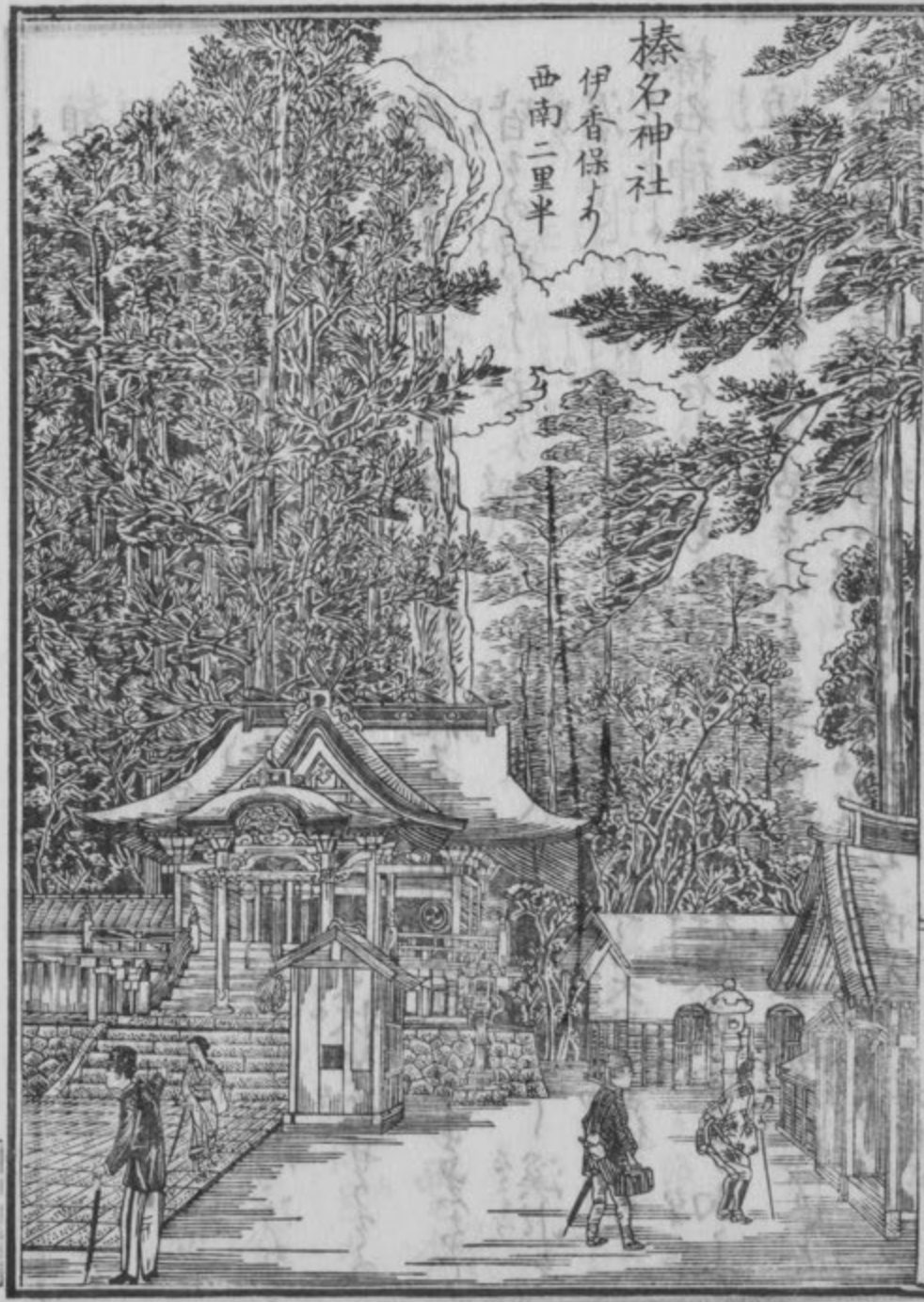
榛名山神社 榛名山の南の中腹よりあり社殿東南より向ふ
 近地の郷社を古より三千百坊もあり繁昌ありしと
 云後慶長十九年當山法度の御朱印を南光坊 東廬山の
 天海僧正より

伊香保

天香樓藏梓

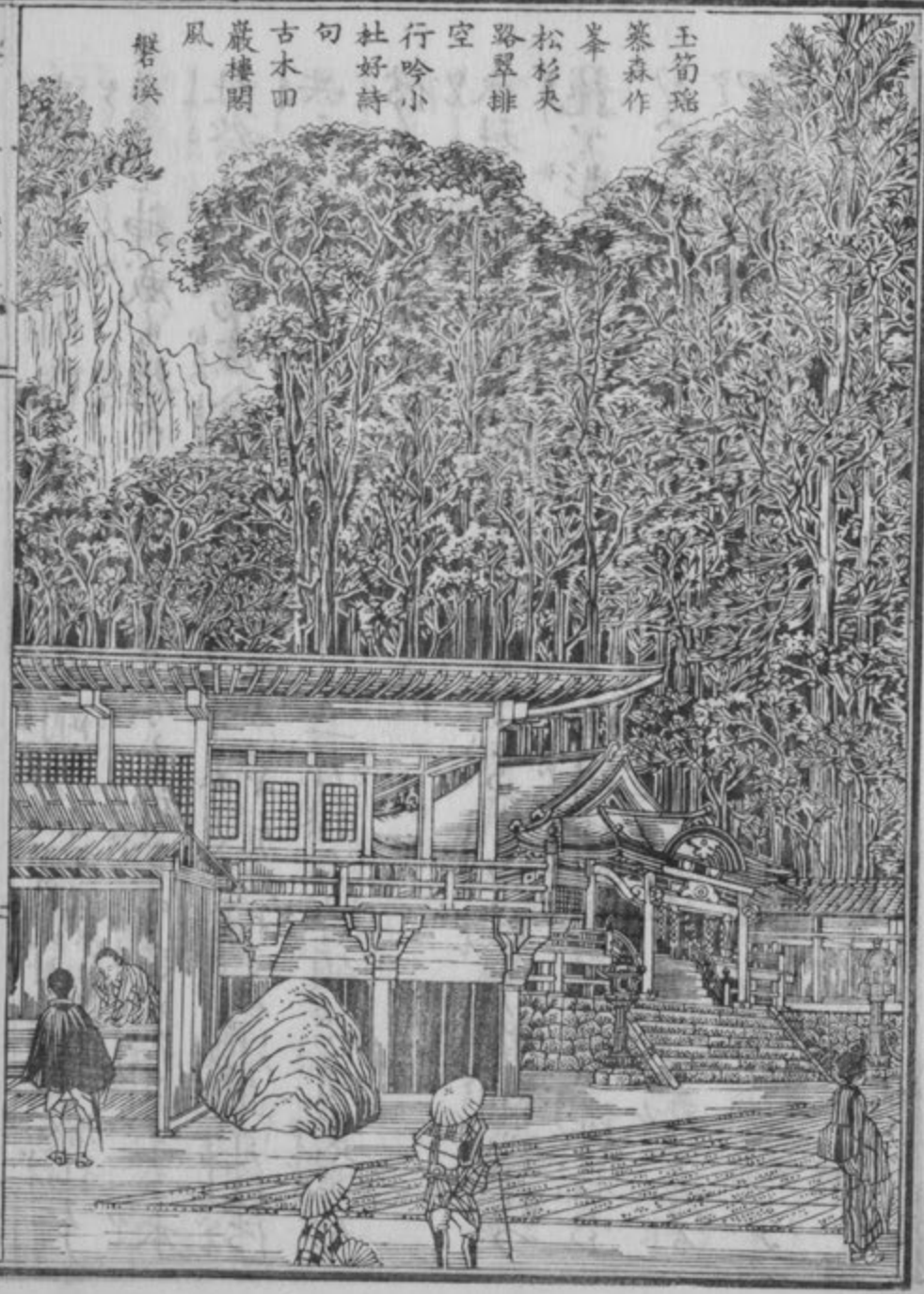
榛名神社

伊香保より
西南二里半



中ノ二十六

玉筍瑤
慕森作
峯
松杉夾
路翠排
空
行吟小
杜好詩
句
古木田
巖樓閣
夙
磐溪



伊香保

天香樓藏梓

遣^つまらざる徳川氏の次を別當全剛院山下里見村光 東嶽山子明^あちと兼ぬ
 屬^{ぞく}し神威^{しんゐ}も殊^{こと}子^こなるのみを今^{いま}を神官^{しんくわん}の守^{まも}る所^{ところ}とある本
 社祭神元湯彦命^{しんまつり}といふ祭神の事委しく未の三 創建年月社傳神の辨^{わか}めま^まり祀^{まつ}す
 共^{とも}に詳^あら^らむ社^{やしろ}は建久元年十二月榛名寺領云々の文書と
 傳^{つた}へたるのみ九月九日七例祭や
 本社へ登^{のぼ}る坂^{さか}を石段折^{いしがんせ}を曲^まりて中段^{ちゆうかんだん}子^こ雙龍^{さうりゆう}に建^たつ
 流^{なが}れど彫^うり門^{かど}の上^{うへ}子^こ大巖^{おほいわし}多^{おほ}く峙^{たて}つ形^{かたち}を以^もて壇^{ひがし}斜^{しや}石^{いし}を
 りふその外社地^{わがいしゃち}をまへて巨巖^{おほいわし}大石^{おほいし}突^つ元^{もと}を以^もて腕^{うで}で立^たてたる
 如^{ごと}く圍^{かこ}むる登^{のぼ}る本社^{ほんしや}を社^{やしろ}の後^{あと}子^こ御姿^{おんすがた}石^{いし}といふ
 所のまへて空^{そら}を衝^つきて聳^{そび}え立ち中括^{ちゆうかく}きて上^{うへ}子^こ頭^{かしら}を

中二十七

覺^{おぼ}しき形^{かたち}なり頂^{たか}に幣^{へい}立^たてり此^この巖^{いわし}のト子^こ社^{やしろ}を作^{つく}り
 めけり巖^{いわし}の中に神座^{かみま}をまゝいへる本社^{ほんしや}拜殿^{らいでん}神樂殿^{かみらでん}額堂^{がくどう}
 ありは彫^うり刻^き美^みを盡^{つく}し丹朱^{にんしゆ}金^{きん}彩^{さい}きらびやの白^{しろ}を以^もて莊^{まじ}
 嚴^{げん}あり鐘^{かね}子^こ文永^{ぶんえい}五年二月十日大勸進僧栄園^{おほいんえん}のりありと
 云^いふ又額堂^{がくどう}の前^{まへ}子^こ鐵燈籠^{てつとうろう}子^こ上野國車馬郡滿行權現靈^{うらまのこまぐまぐんまんぎんけんりやう}
 前元亨三年云々とあり
 石段^{いしがん}を下^{くだ}りて下^{くだ}り茶屋^{ちやや}あり右^{みぎ}の路^{みち}を即^{すなは}ち伊香保路^{いかうほろ}子^こて
 裏門^{うらもん}關所^{せきしよ}の跡^{あと}なり右^{みぎ}を總門^{そうもん}の方^{かた}へ到^{いた}る路^{みち}の左^{ひだり}を谷川^{やがわ}を
 神橋^{かみはし}を渡^{わた}る路^{みち}の左右^{さゆう}子^こ岩^{いわ}ありて間^まを僅^{わずか}に二尺^{にじふ}許^{ばかり}ありて
 袖摺^{そでずり}岩^{いわ}といふ三重^{さんじゆう}の塔^たなり此^この塔^た年^{とし}舊^{ふる}き杉林^{さきばやし}といふ立^たつ

千本杉せんぼんさしとりの又橋はしを渡わたりて隨身せうじん門かど仁に及および紫銅むらさきどうの鳥居とりかど
 けり下くだを春名山はるみやま村むらあり神人かみしの家いへ左右みぎひだりに並ならびり法師ほうし町まち
 とりふ三十六戸今いま町まちを坂さかを東あづまあり連つらなる村むらを下くだきバ松杉まはら杉
 路みちを夾はさみ其その々ごととして雲くもを衝つちり降くだる路みちを西南せいなんあり三野倉さんのから子こ
 至いたるニセ本路ほんみちより又東南とうなんを明屋村あきやむら箕輪みわ古道ふるみちあり南みなみを室むろ
 田村のりむらより下くだる路みちもけり共各ご三里さんり

各地高低表

伊香保近傍各地の海面よりの高さを左のめしりてを明治十二年夏小林一知君の實測せる所ありと云
 晴雨針觀測にりて尺ハ日本曲尺あり
 高崎驛本町 二百六十。尺 即四十三間二尺

- 水澤觀音堂上 二千。三十九尺 即三百三十九間五尺
- 伊香保千明三郎屋敷 二千五百六十三尺 即四百廿七間一尺
- 同 湯澤谷底 二千四百五十一尺 即四百。八間三尺
- 同 向山 二千五百十四尺 即四百十九間。尺
- 伊香保神社 二千七百十六尺 即四百五十二間四尺
- 同 金毘羅山 二千。四十三尺 即五百。七間一尺
- 同 湯元 二千八百三十九尺 即四百七十三間一尺
- ニッ岳蒸湯 三千五百廿七尺 即五百八十七間五尺
- ハッ塚榛名路春名村界 四千。廿八尺 即六百七十一間二尺
- 伊香保沼水面 三千六百七十二尺 即六百十二間。尺

天神峠 三千八百五十五尺 即六百四十二間三尺
 榛名神社 三千。七十五尺 即五百十二間三尺

産物

伊香保の産物の第一やまを所を即温泉にして一村實より
 子依りて生ぜしむやりの製造の産物少く湯花漆といふるを
 綿布と湯滓にて染む色赭黄とある腹腰子絡ひて功能あり
 や、いり又鏡の拭粉と製砥の粉と天花粉より製し別
 奉書紙と温泉より浸し乾して揉むるに拭ふる能く銅
 鏡の光を生ぜしむやりの外は湯晒艾のり又近き山の雑材
 て用るる挽物細工して高き店多し山下の畠子植うる大根を

甲ノ二十九

物聞山の時鳥

伊香保町の東南
 八町子、ゆり、俗子
 コニヒラ山といふ八景
 の一とす

夫木集

伊勢

いついふるおけ山の
 いろはのなす
 まいゆのなす

何來新杜宇啼破嶺頭雲

借問隣樓客一聲聞不聞

磐溪



大ありその他小麦粟糝蕎麥、ゆりのみ冬を氷蕎麥切氷
 豆腐など製を凡市中日と食用料理の魚鳥穀菜瓜果等は
 近村より来りその他雑種の食用日用品を皆高寄り来り夏
 を是等の品々の需要莫大なる事あり

近傍の山々草木禽獣等の珍奇とまばまりの甚希あり蛇
 蘇草草烏頭糝斗菜等々、萱草の一種花の一重ありの
 風雨の後多く生香草出づ山林の楢栗がしを多く生ぶその
 外近き山々花草多く秋を殊麗し物聞山の鶉名は慈悲
 心鳥を鶉子元ならず啼き泣き止む鶉多くしく味美あり

甲三十一

伊香保の沼の、ゆやめを写生

八景の一と沼の末の汀に
 多く生ず古歌多しや巻に
 狭し田中芳男君云花戸はカマヤマアヤとゆふそのありと岸田吟香君
 古歌子ゆふハナカツミに深山より多く今ハナミヤウブといふこれ
 里より移し養ひしに、菖蒲は似たれば名とせるあんといへり

拾遺草

伊香保の沼の、ゆやめ

ゆやめをかく

定家



文人記靈窟勝概
 各相誇雲客殊其
 賞艶稱社若花

耕堂楫取縣令

沿の岸 今より二十年前まで近き山子 雉子 兎 猴 猪 鹿 云々
 はまし 近年と獵て盡せめと云伊香保沼は鯉 鮒 魚類多し
 されど多く捕らば夏秋の間東の方三里と隔て利根川の香魚
 来らるれと遊浴中の最珍羞とまべし

伊香保椿名三神の辨

延喜神名式は上野國十二社 大三座の内 群馬郡 大一座 伊香保神社 小二座

名神 椿名神社 甲波宿禰神社 甲波宿禰神社へ今群 馬郡川島村 大の中の

伊香保椿名の二神と今の椿名の神との間を昔より論りてその

説區々あり或説は式に椿の字と書あると椿の字の誤り

その證を神名帳頭注に群馬郡椿名 其所椿名と記し ありまを

中ノ三十一

式を椿名とされど實を椿名の書損ありと下心を思へども
 され注しむけきを其所椿名とされしは 此椿名 椿名で式
 の椿名神社 其所椿名 箕輪の椿山 其所椿名 椿名神社を 此椿名 椿
 名の里宮 其所椿名 ありと云又或説は椿名の椿をハルを讀むべき
 ツバキや讀むを誤りありと云後 其所椿名 椿と文字を讀む
 たりと云今按 其所椿名 萬葉集は古く伊加保呂の岨乃椿
 原 其所椿名 又延喜主計式の上野貢調の部に椿布二十五端 日本紀
 衣 其所椿名 ありと云 其所椿名 古く椿は因 其所椿名 山の名は古くあり
 椿名 其所椿名 ありと云 其所椿名 椿名あり後 其所椿名 椿名 其所椿名
 たりとの説を非 其所椿名 且椿の字をハルを讀む 其所椿名 何 其所椿名

小や解きつるに又椿と榛の書換ありやうも當らば頭注の
 説を都人の遠地の地理を知らぬ推量ありし椿名の神は今も
 箕輪の椿山子座しその地名より又榛名を榛原子因
 りれどもやより各別ありし又榛名の神も大成經の説は據
 甲子元湯彦命ありしに此神の本箕輪の椿名の神は天照大神
 三輪大神西宮大神にて祭神と古し又當國甘葉郡一の宮や
 群馬郡總社とあり古く傳へるやうに上野國神名帳や名づくる
 りのす群馬郡群馬郡子正一位伊賀保大明神從一位椿
 名大明神正一位榛名大明神分ち載せたり又或説す式々伊
 加保の神と今の榛名の神は三代實録より若伊賀保の神と

中ノ三十二

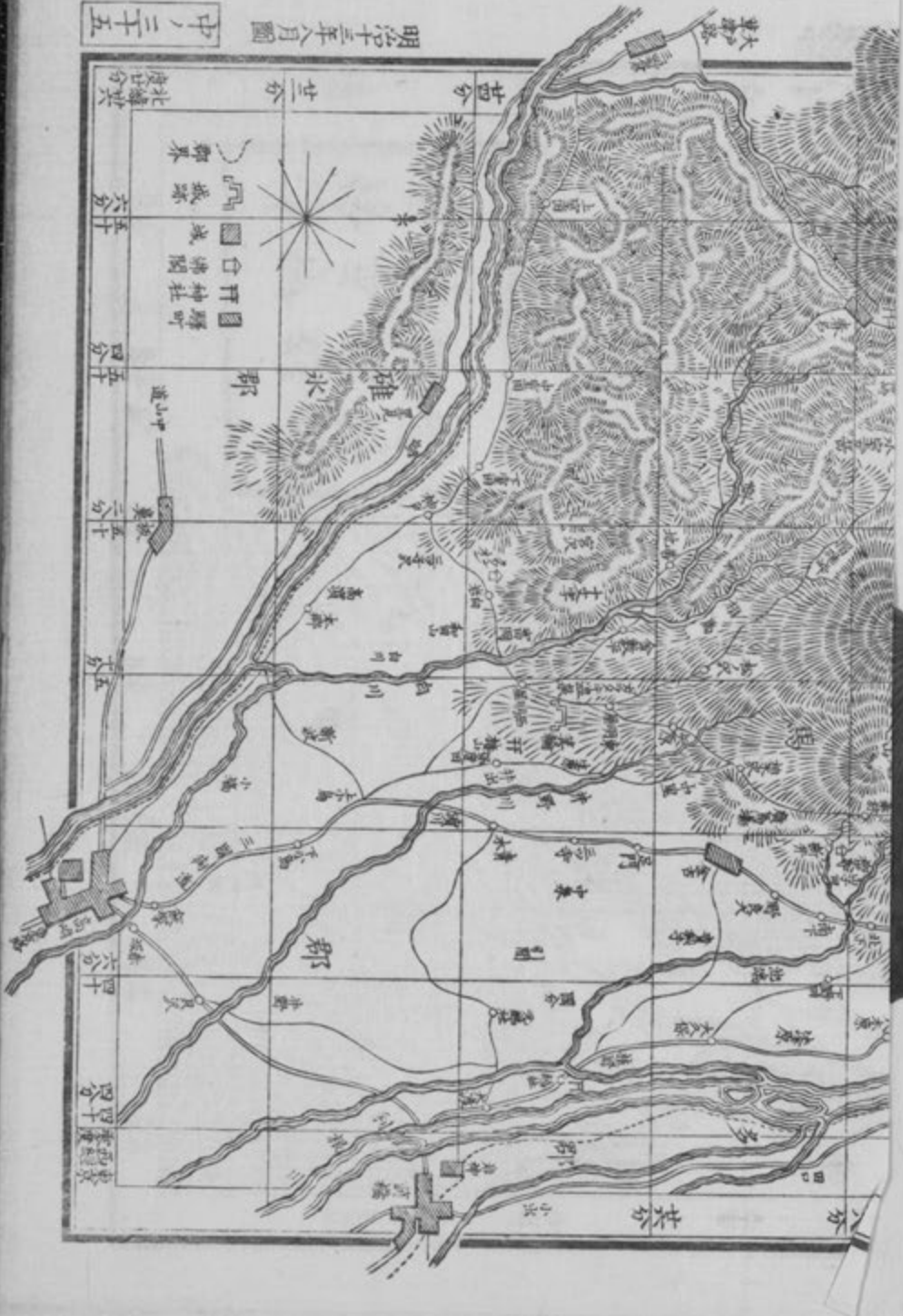
今の伊香保村子座す神やせりやうも是字にまき妄説あり若
 伊賀保を今現に有馬村子とるものやとて伊加保榛名の二神
 をその名久しく埋むる榛名のみむやう著きものからみよいたり
 然るに今此より余が辨て述ぶ終まじり固より余の推量の
 説より今を榛名の神人より官子申して榛名山なる神と式乃
 椿名の神の本宮は椿山なる外に里宮と定めらるるといへり
 然る上も我人やもたその官の制子後ひてをいへるに
 榛名の祭神を先代舊事本紀一名大子双槻宮上毛國秦名山
 峯權現元湯彦命也天照大神五代依りて元湯彦命一名彦
 由文命又彦湯支古史傳卷十云

伊加保神社の祭神も今と湯前大明神を以て少毘古
 那の神ありとぞ一説は元湯彦友命又の名彦由支命を申す
 今此社の事記せる物に見えり元湯彦友命彦由支命と
 同く神名古書より未見當らば彦由支命のまゝの
 名ありと覺ゆ此社は並び椿名神社と云ふ社の今椿名
 山といふ山はゆつて俗に満行宮大権現といふ此神も元湯彦
 命ありと社説あり一説は中に伊弉諾伊弉册尊左右を國常立
 尊大己貴命といふをうけつて或説は子武
 子椿の字を著けりを椿の誤
 ありといふるを然ら説ふありと云ふ萬葉集より伊香保呂能蘇
 比乃波里波良傍の榛原あり榛名山の
 地名より由らりと云ふ云と

此古史傳の説より伊加保の祭神をも一説を引きて元湯彦友命

何事を據せり榛名の社説と混じ誤せり
 又神名を少彦名命の別名ありといへるも大成經の説
 知らざりし元來大成經も榛名の神を伊加保
 の神と見たるや神名より湯の字を用ふるや又僧侶の守る
 頃を満行宮權現満行將軍或を彦友尊美滿持尊植安大神
 稱し或を本地の地藏尊ありといふり又満行を佛經の
 語より人名の附會して辛科縁起といふ事を上野國西
 七郡の領主群馬太郎満行と祭るや云又榛名由来記を以て
 にも南部三郎満行と祭るや榛名より遠流せり帝を怨む
 事あり伊香保の沼より入水を依りて其靈を祭るありと

その説せつよく怪あやしく何なにをも取とるは足たらざる説せつどもあり此社このやしろを
 建けん久きう年中のちゆうの文書もんじゆより既まに榛名山しんざん寺のてらの稱なづけらるる早はやより佛ぶつ
 氏しの手てより創つくり建けん年月のげんげつ及および縁起えんぎ等らも社やしろをも更さらに傳つたへたと云い
 又また案あんより大おほ己の貴命きのみこと少彦名命すくひなのみことの二神ふたがみ醫藥いやくの事ことと始はじめり給たま
 ひり故ゆゑに諸國しよこく温泉おんせんの地ちを必かならず二神ふたがみを祭まつり佛氏ぶつし垂跡すゐせき
 の説せつを薬師佛やくしふつとす事こと河安かやすの地ちも同おなじ伊香保いかうほ道後箱根みちごへはこね
 伊豆有馬いづの有まも皆みな此こののめし又また神名式しんなしきより攝津有馬郡せつ津有馬郡湯泉神ゆせんじん
 社やしろの今いまも有馬有馬湯山町ゆせんまちの伊香保いかうほまも熱海あつみもその神かみ
 と湯前明神ゆぜんめいじんを稱なづけ事こと湯泉ゆせんの地ちも是こゝに大おほ己の貴命きのみことと云い
 伊香保志中卷了



上野國 群馬郡 伊香保 近傍圖



明治十三年八月圖 中，三十五

上海醫學專門學校
醫學部
生理學
實驗圖

上海醫學專門學校
醫學部
生理學
實驗圖



Kitasato Memorial Medical Library